三位一体論

佛國ボア博士
對
齊木仙醉

258
158

東京日高有倫堂

特18
362

三位一体論

萬國學生大會に與ふる公開狀

序

予は眞理を愛し求ひる日本の青年の一人として此度東京に開かるゝ萬國學生大會に臨まるゝ基督教の諸大家に對ひ、此好機會を利用して、基督教の三位一體說に就きての予の質問、及び予自らの數學的基礎に於ける三位一体說を叙述して教を請はんと欲す、然り而して予は博學、高德なる諸

明治
40 9 9
内交

大家が日本の思想界の進歩の爲に、且は諸大家自身の傳道者たる責任の爲に、予の之の公開狀に對して何等かの答を與へらるゝならんことを希望に堪へず。

齋木仙醉

神に就きての質問

基督敎の神はエロヒムなるか、エホバなるか、天の父なるか果た耶蘇基督なるか。

予は歷史上其れ〳〵異れる意義を有せる是等の語を從來の如く曖昧に混用することを以て、基督が自然神敎なるか、猶太敎なるか、純粹なる耶蘇の敎なるかの區別を沒却し、其結果人をして基督敎の實際の內容及び價値に就きて誤解を惹き起さしむる恐あるものなりと思惟す、予は事の眞相を理解せんが爲に自然神敎のものは自然神敎に歸し、猶太敎のものは猶太敎に歸し、耶蘇敎のものは耶蘇敎に歸する要ありと思ふ、予の見る所を以てすれば今日の基督敎は未だ全く猶太敎と混同せる方面あり、之と同樣に古の猶太人も亦た猶太敎と自然神敎とを混同したり、然れども斯かる事柄に關する明瞭且判然たる知識は大切にして、之の知識は人をして眞に崇拜すべき本尊の何なるや、眞の敎權の何

處にありやを自覺せしめ、世界の萬民を理想的宗教に導くなり、由來基督教は一神教なりと稱せらる、然るにエロヒムの代名詞は我儕と云ふ複數にて記され、且つ「神の像の如くに之を創造(つくり)之を男と女に創造たまへり」とある如き文字あるを見れば、神が陰陽兩性の德を有するとの思想さへ存在せしが如し、エロヒムの複數を解して雷に尊敬の意を表する爲に使用せる複數なりとの說は其論據薄弱にして反證の有力なるに及ぶこと能はず、又基督先在論を以て之を解釋し去らんとすることも不當なり、「此事に就きては別項之を述べん」エロヒムてふ神の觀念は畢竟自然神教的の神

の觀念にして、宇宙の造物主に與へたる名なり、宜なり日本譯の舊約聖書に此語を神と譯せる、若し其れエホバ即ちヤーベに至りては純粹なる自然神教の神にあらずして、國民的宗教の神なり、彼は猶太人の保護神として、契約の神として聖書に錄されあるなり、然れば猶太人のエロヒムに對する思想とヤーベに對する思想とは自ら其趣を異にせり詩篇の第三篇の如きは其好適例なり、我等は通常神と譯せられたるエロヒムと主と譯せられたるエホバ即ちヤーベとを混同しつゝあり獨り我等のみ之を混同するにあらずし、て猶太人も之を混同たる形跡あり、然れども古人之を爲(ナス)も

今人之をなすも不正なる混同は何處迄も不正なる混同なり、其れ自然神教の神は宇宙の神にして啻に我が太陽系統のみの神にあらず、況んや地球のみの神にあらず、又況んや猶太のみの神ならんや、既に猶太のみの神にあらず地球のみの神にあらず、又太陽系統のみの神にあらずとせば安くんぞ猶太人のみを特別に取り扱ひ、此處に顯現し又此處に多くの奇蹟即ち自然法の破格を行ふの理あらんや、試みに創世紀第一章の記事と第二章の記事とを比較して讀め、何等の相違ぞや、エロヒムは天地萬物を造るに言を以てせり、言とは畢竟意思表示の義に外ならず、エロヒムはエホバの

如くに泥土よりアダムを造らず、又アダムの肋骨を取りてエバを造る如き外科醫の行爲に類似せることを爲さゞるなり、基督曰く人は二人の主に事ふること能はずと、予は言はん、然り少くともエロヒムとヤーベの如き二人の主に事ふることは不可能なりと、抑も基督教はエロヒムの思想系統に屬するか、ヤーベの思想系統に屬するか予は不幸にして基督教を以て全然前者の系統に屬すと言ふこと能はざるを憾む、何となれば基督をを以て奇蹟的意味に於て神子なりとなし、救世者なりとなすオーソリチーたるや契約の神ヤーベに歸せざるを得ざればなり、即ち基督教徒は天の

父と云ふ理想に於て一旦猶太教を超越したるにも拘はらず、基督論に於て再び猶太人的の偏見に束縛せられたればなり、夫の父と云ふ思想は先づ基督教の神觀の醇なるものと見て可ならん、之の思想たるや假令基督の獨創の思想にあらずして、豫言者イザヤ等の之を說きたるものたり、又支那印度等には極めて古代より存せし思想なりとは雖も、基督の熱心に由りて高調されたるものなること疑ひもなき事實なり、然れども天父をば之の名の下にイザヤが指したる如くエホバの謂なりとせずば何を以てか能く基督の奇蹟的誕生、復活昇天を證しせんや、進步派基督教徒と稱して

前掲の如き奇蹟をば信ぜざる人々が保持せんとする基督無罪論の如きも、吾人の臆測以外何のオーソリチーありてか能く之を斷言することを得ん、若し其れ基督教が其の崇拜の對象を造物主や契約の神より轉じ、又神子たり受膏者たる基督より轉じて、純粹に人なるナザレのエスに歸らば予又何をか言はんや、予は悅びて彼をヒユマニテイーの好典型として尊敬せんのみ、然れども記臆せよ、尊敬は拜禮にあらざるとを、又基督教にして若し斯くの如く變化せば最早宗教と云ふべからずして道德と云ふの適當なるものなることを、予は敢て聽かんと欲す、諸君は孰れの立脚地を取ら

んとするものなるかを今日の基督教の宗教の對象が斯くも混雜なるにも拘はらず、其矛盾を注意せざるは畢竟融通を利かせ居るが爲なり、予は繰返して云ふ、自然神教の神エロヒムと猶太民族の主エホバとは斷じて相容るべき性質のものにあらざるなり、此れ予が第一に諸賢に對ひて基督教の本尊に關して質問する所以なり。

聖靈に就きての質問

基督教の三位一体中には父と子と云ふ人間的の名を冠するもの二位あるに拘はらず、何故に母てふ位は存せざるか、所謂聖靈は母にてはあらざるか。

聖靈にはペルソナありや無しや、若し之れ無しとせば三位とは云ふべからず、之れありとせば聖靈にも亦適當なる人間的の名あるべき筈ならずや、正統派神學の教ゆる如く聖靈にはペルソナあるものとせよ、而して聖書に教ゆる如く基督を以て聖靈に由りて生れたるものなりとせよ將して然らば聖靈は基督の何親なりや、若し之を父とせば基督には神と云ふ父と聖靈と云ふ父と二人の父あるか何ぞ基督の其生涯に於て神と父と呼べども聖靈を母と呼ぶことの見受けられざるや、聖靈を父と呼ぶことが不道理にして而かも聖靈が基督の親たらば聖靈は基督の母ならざるべか

らざる筈ならずや、抑も基督が天の父を我等に示せりとは道義的のことにして幻影的のことにあらざるは言ふを俟たず、然らば基督は又母德をも現はしたりと見るべき事例聖書に數多あるにあらずや、例へば馬太傳第二十三章三十七節の「母鷄の雛を翼の下に集る如く我なんぢの赤子を集めんとせしこと幾次ぞや」の如き之なり、斯くても尙ほ基督は父を現はすと共に母を現はしたりと云ふことを得ざるか、「神は愛なり」と敎ゆる基督敎は大に母德を發揮せる者にてはあらざるか、予は繰り返して問ふ、斯くても尙ほ基督は父を現はすと共に母を現はしたりと云ふことを得ざるか、

本尊の中に父母を認むることは直ちに之れ二神論なりと云ふべきか、然れば父と子とを說くも亦二神論にあらずや、父子一體が信じ得べくば父母一體は更に容易に信じ得べきことにあらずや、予は思ふパーソナルと云ふことは必ずしも深き哲學的の言葉とのみは限らず、我等は日常の會話に於て相互の間に我と言ひ汝と言ひ彼と言ひて、パーソナルに呼び合へり、假令哲學者の眼には宇宙は一元的のものなるにもせよ、我と汝と彼との三種の人稱代名詞の使用を難ずる者ぞ、世に議論囂々たるツリニテリヤンとユニテリアンとの關係又斯くの如きのみ、既に第一人稱と第三人稱

とが許さるれば第二人稱も亦許さるべきは自然ならずや、予は思ふ、父と母と子との三位一體は人情の自然に出づる信仰にして、三種の人稱代名詞の成立も同樣なるものなりと、然るに世人の既に三位を列擧しつゝ而かも尙ほ父が母を兼ねたりとか子が母を兼ねたりとか云ふ如き苦しき辯解をなすは全く不道理なることなり、眞理に對して執拗なる態度なりと云はざるべからず、又世には三位一體のことは神の內性のこと故、之を知るの要なしと說く者あり、此說も亦誤れり基督敎徒が父と子と聖靈の名に入れてバプテスマを授け又は授けられつゝあるにも拘はらず、三位一體

の內容に就きて確信する所なきは決して正しき事にあらず、若しバプテスマなるものが只一種の禮式に過ぎざるならば猶ほ可なり、若し然らずしてバプテスマなるものが眞に吾人の宗敎的實驗の奧義ならんには、之が內容を不問に附し去ることは明かに背理の行爲と言はざるべからず、試みに思へ吾人の聖靈に就きての研究が遂に其母德を承認するに至れりとせば、天主敎及び殆ど新敎の各派に於て採用せられ居る聖靈は父と子とより發すと說く敎理の如きは大なる矛盾にして殆ど瀆神的の說と云はざるを得ず、何となれば之れ母は父と子とより出づると說く不倫の說な

ればなり、（聖靈が子より出ずとの思想を正しくは如何に解釋すべきかは別項に之を述べん）予は終りに臨みて比較宗教學の助に由りて予の說を確かめん。

抑も三位一體の思想は極めて世界的のものにして、支那にて之を天地人と云ひ印度にては之を因緣果と云ふ、見るべし三位一體の思想は世界の宗教の根本的形式なるを、決して三位一體は基督教の專有物にはあらざるなり、而して支那、印度の三位一體の思想中には確かに父、母子の德が含蓄せられ居るを見る、豈基督教の三位一體のみ除外例なるべけんや、殊に創世紀第一章の天地創造の神エロヒムの思想は十分之と同樣の思想發揮せるをや、諺に曰く、名は實の定見なりと予不肖と雖も名の爲に名の議論をなしつゝある者ならんや、大義名聞を明らかにするは之れ誤を正して完全に進むの道なればなり、之れ予が第二に聖靈は母なりと云ふべきや否やに就きて諸賢に質問する所以なり。

基督に就きての質問

基督教に於ては基督を以てロゴスなりとなし、基督の先在を主張して彼を以て造化神の一位なりとなす、之れ果して眞理なるか。

基督教の三位一體の教理がプラトーン及びフイローの哲

學思想に深き關係あることは人の熟知するところなるが、其淵源は猶太にも固有に存せしこと疑ひなし、神學者が其著しき例證として擧ぐるものは神が天地萬物を創造するに言を以てしたること、及び箴言中に知慧をば擬人したる習慣等なり、然るに箴言第八章に於ける知慧の描寫は之を神の息子としての描寫と云はんよりも寧ろ母としての描寫と云ふを適當とす、又タルムードの格言中に知慧を以て母の表徴なりと云へるところあり、然れば箴言の文字は決して基督即ち神の息子の先在を證據となるべきものにあらざるなり、人若し基督の先在の證據を舊約聖書中に求め

ば遂に創世紀第一章のエロヒムが吾儕と自ら呼ばれたる其代名詞の複數の中にオーソリチーを見出さゞるべからず、然れども予の考ふる處によれば之の見解も亦大なる矛盾に遭遇するの運命を有するものにて到底成立せず、其故如何にとなれば馬可傳第十五章三十四節にある如く基督は十字架上にて「吾神わが神何ぞ我を遺たまふ乎」と叫べり、而して此語は實に詩の第二十二篇の一節の言葉なり、而して此言葉の中に所謂吾神と詩の第三篇にある吾神とは同一のものにして、共にエロヒムのことを云へるなり、而して其のエロヒムこそは實に創世紀第一章にて吾儕と言ひ給

へる神なり、基督若しエロヒムの所謂我儕の中にあれば何ぞ「吾神わが神何ぞ我を遺たまふ乎」と叫ぶことを得ん、然ればエロヒムの複數的方面を以て基督の先在を證據立てんとする計畫は見事に失敗せりと云はざるべからず。

猶ほ此說は他の方面に於て矛盾せるを見る、何ぞや、今假りに基督を所謂「我儕」と云ふ中に含めるものとせば創世紀一章に錄されたる「我儕に象りて我等の像のごとく我等人を造り之に海の魚と天空の鳥と家畜と、全地と地に匍ふ所の諸の昆蟲を治しめん」とある神の世繼とも見らるる人てふものゝ地位と、神の息子なりと稱へらるゝ基督の地位との關

係を如何に理解すべきや、此文中に現はれたる者の理想は極めて壯嚴なるものにして正に理想的の神子と呼ばるべきにあらずや、予はエロヒムに像りて造られたるものゝ他に神子あることを疑ふ、予は人其者を以て神子と仝一視せんと欲する也、見よ創世紀第一章の記事にはアダム、エバてふ人祖の名も錄されず、從つて彼等の犯罪の記事もなし、猶太と云ふ地方的色彩を有するエデンの花園の名もあらずして眞に堂々たる世界的の大記錄なり、第二章以下のアダム、エバの記事と混同すべき性質のものにあらざるなり、斯くの如き人てふ思想は神の子供たるに値ひせざるか、其れ

基督は眞の人にして又眞の神、換言すれば神性と人性との兩面を有すとは正統派基督教徒の信仰する處にあらずや、然らばエロヒム未だ人を造らざるの先に如何にして神人基督は存せしか、若し基督は神人なるもロゴスは只神のみにして人性を有せずと云ふ者あらば予は此人に對ひて物の命名の原則の反省を請はざるを得ず、試みに思へ人間界に於ける父と子とも元來一体のものなれども、分身する以上は嚴然として父は父たり、子は子たるなり、又男女の如きも全じく之れ人なるも其特徴を異にするが故に男は男たり女は女たるなり、人と爲りて彼の基督を子と云はば人と

なるの前の基督は父なりしか若しくは母なりし筈にて全じく之を子なりとするは定義の亂用と言はざる可らず故に論者の説は成立せざるなり、予はエロヒムの我儕と云はるゝを寧ろ父母の意義に解する者にして之に像られたる人其者を其子なりと考ふるものなり、而して此人てふ思想を最も廣義に解して、少くとも人類全体の中に通ずるものなりと考ふる者なり、且つ予は正統派の信者が父より出づる聖靈と考へたるものと子より出づる聖靈と考へたるものとを區別して、前者を以て父に對する母なりとし後者を以て夫に對する婦なりと考ふる者なり、斯く見來れば創世

紀第一章には明白に父母と夫婦一體の子の三位一體の表はされたるを見るなり、之を要するにロゴスを神の息子なりと信じ、又基督をロゴスなりと信ずることは基督教信者の基督に對する偏愛に出るものにして公平無私なる眞理にあらずと考ふ、此れ予が第三に基督とロゴスとの關係に就きて諸賢に質問する所以なり。

齋木仙醉に答ふる書

親愛なる足下よ、フイッシャー氏は貴君の最も有益なる手紙を予に送付して、予が足下に答ふる樣請ひ來れり、予は敢て之を爲さんと欲す、之れ足下を敎へんが爲にあらず、又適當なる意味に於て足下を啓蒙せんが爲にもあらずして、却て單に足下と仝一の問題に就きて思想を交換し、以て足下の手紙が如何に多く予に興味を覺えしめしかを足下に示さんと欲するのみ、而して足下の思想たるや予に取りては重大なる考察をなすべきの價値あるものなりと思はる。

「基督敎徒が彼等の神として尊ぶところのものはエロヒムなるかエホバなるか」と足下は言ひぬ、何故に、予は予の順番に於て問ふ、何故に足下は斯かるディレンマを置くか、予は好んで言はんとす、前者にてもなく又後者にてもなしと、又

予は好んで答へんと欲す兩方なりと、予の見る所を以てすれば神の默示は進歩的開發的なりしが如し、即ち神はヘブリュー人民をその立てる低き水平線に於て取りて彼等に自己を默示し給ひぬ、而して光は只少しづゝ徐々として猶太人の目に映じたり、ヘブリュー人等は最初は彼等を圍繞せる諸國民の如く多神教徒にて、神性に關して粗野なる觀念を混入せしが聖靈の感化の下に一神教の觀念に、次に此の一神が又全人類全宇宙の神なりしとの親念に到着せり(即ち唯一神教)此の唯一神を彼等は最初權能者として考へたり、次に預言者等の說教の感化の下に次第次第に彼等は神を道德者として正義なるもの聖なる者として考ふるに至りぬ、最後に耶蘇基督出でゝ神は愛なり天父なりと默示することに由りて完成的に此の進歩的なる默示を齎らしたり、斯かる次第なればエロヒムとエホバとは此の進歩的なる開發に於ける種々の階段を代表するものにて其動機たるや連續的なるものにて、一は他を後に見捨つるなり、耶蘇基督の神を拜することに於て予は或意味に於てはエロヒム又はエホバならざる所の神、又或意味に於てはエロヒムとエホバとの兩方なる一つの神を拜す、彼はエロヒムとエホバとが含むところの大なること美なること、眞なる

こと、正しきこと、聖なることの如き凡てなり、然れど彼は尙ほ其れよりより多くにして且つより善し、予はエロヒム又はエホバを繰り返さゞるべし、予は彼等の中に撰擇を爲さゞるべし、予は耶蘇基督の神の默示によりて兩方を結合し、又予は耶蘇基督の父なる神の中に兩者を超越す、耶蘇基督の父なる神の默示を準備し又可能的に爲せし所のものはエロヒムを信ぜし民エホバを信ぜし民なり、耶蘇基督の默示はそが之を保ち、之を全ふし、又之を完成する所のエロヒム及びエホバの默示に歸着するなり、エロヒムとエホバとは二つの相異れる主にあらずして、却て二つの異れる見地より觀たる全一の主なり、而して耶蘇基督の父も亦彼の眞なる性質と性格とを確然と默示するところの優れたる點より打ち見たる全一の主に外ならず。

二、予は神が他國民の中より猶太人を獨斷的に撰びて彼等に特殊なる祝福を與へ而して只彼等の間にのみ奇蹟や不思議を行ひ給ひしと云ふ舊思想の甚だ惡しく又厭ふべき思想と見ゆることは全く能く之を理解す、予は事實斯く有るべしと考へざるなり予は神が到る處に於て人々を彼れ自身に引き寄せんと試みつゝ、彼等を啓蒙し又彼等を救はんが爲に全人類の中に、全宗敎の中に働らき給ひたる又働

らき給ひつゝあること、及び彼の靈は各人の靈魂の中に超自然的に働らきつゝあることを信ず、予は、故に到る處に全人類の中に人が之に由りて以て神に不思議にも祝福され又は嘘氣せられたるところの眞實なる宗教的實驗あることを信ず、然れども人は常に又到る處に於て神の目的に答へたるにはあらず、而して非基督教的の宗教の中に予は人間の態度によりて暗らくされたる、止められたる、妨げられたる神の默示を發見す。吾人は悉皆の國民は眞の宗教と默示とを失ふに至りたりと言ふことを得ん唯獨りイスラエルに於てのみ、幾多の嫌惡すべきこと及び缺點のあるにも係はらず、人類は神の默示に對して柔順且つ忠實なるべきものとしたり、而して此事たるや何故に神の默示が耶蘇基督によりて與へられたる確然たる默示の中に自己を發展し又醇化せしかの理由なり、而して耶蘇基督は完全にして又罪無き人にて、常に而して全く神に柔順なりし人なり、又常に神の嘘氣に恭順なりし人なり、神は耶蘇基督の中に於て充分彼れ自身を默示したり何となれば彼は基督の中に彼の默示を腐敗せしめ、退化せしめ、若しくは妨害せしむる何物をも見出し給はざりければなり。

三、貴君の示す如く聖靈を我等の母として記載すべしとの

陳言に對する予の唯一の故障はそほ恐らくは餘り文字通りに又物質的に言葉を取ることゝなりはせずやとのことなり、言葉は畢竟形象ならずや、若しも我等が詩篇に於て神は岩なりとか、楯なりとかとあるを讀まんも、我等は必らずや神が物質的の岩や石や眞實の楯にてあらざることを考ふることを餘儀なくされん、岩とか楯とかと云ふ言葉は只表徴のみ、耶蘇に由りて神に適用されたる父と云ふ言葉も亦斯くの如し或聖書の校本が神若しくは基督に屬すべき思想なりとして暗示するところの母と云ふ言葉に於けるも亦然り、物質や空間や物理的の組織に關係ある凡ての言葉は形象なり、何となれば我等は斯かる種類の何ものをも靈なる神に附屬せしむること能はざればなり、世には道德的又は精神的の性質の形象あり、然れどもかの岩と楯とを相異せる人格、若しくは神性中の身位として分れたる存在を附屬せしめざると全樣に、予は神の中に存する代表的なる相異せる身位として父と母とを考ふる何等の理由をも見ざるなり、予は大に聖靈の人格的なることを信ずる傾向を有す、靈は常に人格的なり、然れども神の靈は神の人格に異れる人格にあらず、これ恰かも人の靈は人の人格に異れる人格にあらざるが如し(哥林多前書二章十一節、聖靈なる

ものは創造に於ける神の不思議なる靈的の活氣を指すより、予は實に母の象によりて聖靈を指示するに就きて躊躇する處無かるべし、然れども予は彼を全樣に父の象によりても指示し得ん、又交互的に、神を父と名けつゝ、予は大なる困難なくして、母てふ言葉を使用することに於て我等に對する神の愛を指示することを得ん。

曰、予は神の象に肖せて創造されたる人は神の眞の子たるべく企てられしものなることを悅んで承認せん—地上に於ける最初の人にても或はいま一人のものにても、若し神の創造の理想を實現だにせば—能く神の子たることを得しならん、不幸にして罪惡は潛み來り、此の神子權を實行することを妨げたり、而して此は敎理上の一迷信にあらずして、我等を取り卷く實驗的の事實なり、見よ天下何處に神の眞の子やある、罪惡は一つの母の如く人類を超えて速かなる領土を得つゝ、一個人をして眞實に神の子たらしめんには一つの權、一つの力、一つの神聖なる或物を得せしむることによりて、初めて罪を超えて勝利し、神の聖なる如く聖とならしむることを可能ならしめんのみ、斯くの如きは之れ靈の例外的の度量、單一的の度量ならずや、而して逆に斯かる人の自由は不斷にして常に靈の嘘氣によりて萬事をな

し、而して常に靈と共に働らくなり、斯かることは耶蘇に於て唯獨り耶蘇に於て起りぬ、之れ彼をしも神の獨子又は神なる人、人なる神と云ふ所以なり、我等が基督の先在を語る時に、勿論我等は人間の体と心とを有せるナザレのエスの先在を語ること能はず、我等は耶蘇基督の人間的の靈魂と其れ自身を密着に結合せる此の神的原素の先在を語るなり、而してそは神の靈に他ならざるなり。

予は此等の僅かなる講說が能く貴君の議論に答へしか、又予は能く貴君の思想を理解せしかを知らず、予は又予が充分明白に予の思想を言ひ表はし得たるかを怪しむ、予にして若し充分明白ならざりせば、予は憚りながら貴君の親切に之を予に知らしめんことを乞ふ、而して予は貴君の更に進みての質問に答ふるの幸を得んと欲す、貴君は予に書きおくり能ふ。

予が貴君に交付したる觀念は理解されざるべからざる所の中心思想なり、予は單に予自身の責任の下に之を書きしにて學生仝盟大會の名に於てにあらず。

予を信ぜよ

眞摯なる又尊敬すべき貴君の

ヘンリーボア

佛蘭西モントーバン新教神學校組織神學教授學生大會に於ける佛國基督教徒の代人

ボア博士に答ふる書

予は足下の高尚なる品性を示せる手紙を受取りて之を讀むことを得たるの幸福を悅び、又足下の最も親切なる教示に對つて大に感謝の意を表す、抑も三位一体の問題たるや予と予の妻とが其半生を之が犧牲として捧げ之を闡明し且つ之を弘布し來りたる事柄にして、今足下及びボスウォルス氏の如き有名なる人々によりて仝情ある批評を惠まるゝことを得たるは、之れ恰かも予に取りては雪の下に埋もりし可憐なる野の小草が惠み深き春に遇ひて花開くが如き感なき能はず、あゝ予は之を思ひては實に涙無くしては我が神に感謝し能はざるなり、茲に予は公開場にて充分に言ひ表はし得ざりしところを補ひ且は足下の手紙に對して答ふる所あらんと欲す。

足下は予が基督教徒の拜する所の神は誰なるか、エロヒムなるかエホバなるかと云ふデイレンマを置きしことを訝かるが如し、然りと雖も基督教會の實際は予が何故に此デイレンマを置きたるやの理由を證明して餘りあらん、視よエ

ロヒムてふ原語はゴッドに飜譯され居れり。而して基督教徒の至上者に與ふる名は實に此ゴットと云ふ名ならずや、若し其れエホバてふ名に至りては今も尙ほ熱心なる說教者や著述家や通常の信者等が何の疑惑もなく之を使用して休まざるにあらずや、基督教の教理とエロヒム及びエホバとの交渉は暫らく措き、實際的方面のみより見るも予が斯かるディレンマを置きたるは決して不當ならずと信ず、而して此ディレンマに對して前者にもあらず又後者にもあらずと答ふることは必ずしも困難なることにはあらず、然れども此答案は吾人をして更に基督教は其固有なる意味に於ける有神教なるやならざるやとの問に導くものなり、何となれば神と云ふ思想のキャラククースティックは世界の創造及び支配に存す、之の二者を捨つれば他に殘るところのものは「神は愛なり」否寧ろ愛は神なりとの一思想あるのみ、此思想に就きては後に之を評せん乞ふ今は先に進ましめよ、足下の言はるゝ如くエロヒムとエホバとは共に猶太人の中に下されたる神の顯現なり、然れども之を以てエロヒムとエホバとを全一者なりと云ふこと能はず、今昔時の日本人が神は駸入し來る敵國の艦隊を神風を以て破壞すと考へたりとせよ、而して今日の日本人は神は宇宙

的なるものなれば日本の爲に故意に自然法を破るものにあらずと考ふるとせよ、我等は此兩者が共に日本人なるの故を以て兩者の神も亦仝一者を異りたる立場より眺めたるに過ぎずと云ひ得るか、予は然らずと思ふ、宇宙的の神と國民的の神との兩立すべからざるとは一神教と多神教との兩立すべからざるよりも一層甚だしきものあり、率直に云ふ予はエホバよりエロヒムを撰むものなり、否只之に止まらずして基督の所謂天の父よりもエロヒムを撰むものなりと、何となればエロヒムは創造の神、攝理の神、又親なる神なれはなり何が故にエロヒムは親なる神なるかは「神言

たまひけるは我儕に象りて我等の像のごとくに我等人を造り云々」の語之を證して餘りあらん、無より世界を造り出す創造は豈絶大の仁愛にあらずや、物質不滅の法則なるものは往々人をして造物者なる思想より顏を背むけしむるが如し、然れど予は言ふ、之れを悲しむべき信仰の喪失なりと、予は今尙ほ世界に行はれつゝある永遠の創造を信ず、而して聖なる安息日の中に造物主を見出す神か六日間に世界を造り終りしと云ふことを以て不完全ながらも萬物の階段を現はさんとしたるものに他ならずと考ふるものなり基督教徒は動々もすれば言ふ「神は愛なり」と、然らば問ふ

「愛は神なりやと、若し然りと答へなば予は更に問はん、今此處に「人は動物なり」と云ふ命題ありとせんに、之の命題を倒にして「動物は人なり」と云ふことを正當に云ひ得るや否やと、恐らくは何人も然りと答ふるものは無からん、其れ「神は愛なり」との命題に於て神は主格にして愛は客格なり、假令「なり」と云ふ繫辭を以て此兩語を結合するとも兩者には自から主客の差別あり極言すれば「人は動物なり」との命題に於て若し動物と云ふことを主格とし人と云ふことを客格として強ゐて斷定を下せば其斷定は否定的にして「動物は人にあらず」となる如く、「愛は神なり」と云ふより「愛は神(其者)ならず」と云ふ方眞理なるなり、「神は靈なり」と云ふ命題に於ても亦然り、何となれば凡てイクオークチーはアイデンティーにあらざればなり、今點と直線とありとせよ、直線は點よりなるが故に點と直線とは仝質(ホモゼニヤス)なりと云ふことを得、然れど同一者にはあらざるなり、何となれば點は擴り無く(ノー、ダイメンション)にして直線は一つの擴りを有すればなり、予は主格を命題の父、客格を命題の母、繫辭を命題の子なりと考ふるものなり、之れ一切思想の形式なり、主格は客格と混仝すべからず、主格客格は又繫辭と混仝すべからず、ツリニタリヤニズムとは畢竟此文法の堤

唱に他ならず、ユニタリヤニズムとは畢竟命題其者を意味するなり、足下がゴ・ッドヘッドなる文字を以て表言せんとしたる所のものも亦畢竟命題其者に他ならずと信ず、創世記一章の記者は神をエロヒムと云ふ複數にて現はせり、或人は云ふ之れ多神教時代のエッキスプレッションなりと、ヂユブリズムも亦多神教の中に算すべしとせば、確かにエロヒムてふ思想は多神教に屬するものなり、然れども或人の考ふる如くエロヒムを以て千萬の神を意味すと考ふるは毫も信ずべきの理由なし、思ふにエロヒムてふ語は父なる神と母なる靈とを列擧することの代りに之を統括して

兩親てふ一語に約したるが如きものにて、基督教の只父のみを說きて母なきを訝からしましむるに優れり、總じて一元主義の過重は近世の學者の大なる考へ違なり、予は敢て問ふ、二元主義より一元主義が簡單ならば何故に一元主義よりも今一層簡單なる否何よりも一番簡單なる無元主義は一元主義よりも賞用すべからずや、見よ幾何學は擴り無き點を以て出立點となしつゝあり、予は無元主義を以て一元主義に優るものなりと考ふるものなり、乞ふ無元主義と云ふことを淺薄に解釋すると勿れ、神の不可見性と無躰とを信ずるもの誰か無元主義者ならざらん、幾何學上にて點

の他に不可見なるものありや、算術に於て零の他に無躰なるものあるや、直線よりも點がオリジンなる如く一よりも零はオリジンなるなり、零は心に比すべく一は体に比すべきものなり、斯く考へ來りて予は一神教の專横を憤ほる者なり、一神教を以て眞理なりと獨斷するが故に、基督の天父思想はエロヒムの思想に優るが如く誤想せらるゝのみ、あゝ我が親愛なる基督教徒よ、足下等の神は數字的に之を現はせば一にして零にあらず、足下等は零なる神の名にはストレンヂャーならん、然れど之れ零をも神を知らざるが故に誤れるなり、零は東洋思想のエッセンスにして遙かに一

に超えたり、進歩派の基督教徒は往々にして曰ふ我等は神に往くに何等の中保者を要せずと、其言や能し然れど一旦不可見的無体的なる神の數字的には零と云ふべくして一と云ふべきものにあらざることを知らば、其時一てふ中保者の必要の如何に自然的なるかを悟らん、予は三位一体其者の數學的解決としては零、一、無窮の三位一体を取るものなり、$\frac{1}{0}=\infty$ の式は即ち其れなり、足下若し予が數學的三位一体に就きて聽くことを好まば、予は書を改めて之に就きて足下に書き送らん、要するに予は三位一体を以て宇宙の公理なりと信ずるものにして、一体の實質は零、一、無窮其者

なりと考ふるなり、偶ま之を父母子と云ふは宗教的情感もて之を言ふなり、或人曰く基督の神を父なりと云ふは神のオーソリチーやラブを言ひ現はさんが爲にしてゼネレーションの思想は主要觀念にあらずと、然れども子を生ずると云ふことは父の父たる主要なる觀念にして福音史家ヨハネも基督を其生み給へる獨子と形容せるにあらずや、エロヒムの如きに於てはゼネレーションは主要なる觀念なること明らかなり、何となればゲネシスとはゼネレーションの義を含めばなり、又足下は予が聖靈を母と考ふることを以て餘りに文學的又物理的ならずやと疑へるが如し、予は足下の此批評に對して答ふるに否を以てせず、予の見る所を以てすればファーザーゴッドとマーザースピリットとは好きコントラスト、トをなすものにして前者は心の原理たり後者は物の原理なり、スピリットが物の原理たりと云ふは甚だ矛盾せる言葉なるが如きも實は然らず、スピリットは物のエッセンスに他ならず、猶太に於てスピリットと云ふ語が文字的に息氣又は風の意味なることを參考せよ、混濁せる萬物より之を見ればこそスピリットなれ、神より之を見れば寧ろ物なり、幾何學上に於ける直線の點に於ける地位を見てスピリットの神に於ける地位を察せられん

ことを望む、斯かる次第なれば予は三位の中に物理的方面のあることを拒まざるなり、然らば何故にユニタリヤニズムに熱中せずしてツリニタリヤニズムを辯護するに努むるかと云ふに予は正當なる意味に於て此兩者は相容るゝものなりと信ずればなり、今予が足下に對して「我は問ふ汝は彼を知るか」と云はんに假令此語中に我と汝と彼との三人稱は存すとも、予に取りては眞の自覺者は予のみにして足下の自覺者なることは予の直接に經驗し得るところにあらず、第三人稱なる彼の自覺も亦予の保證する所にあらずと雖も、而かも吾人は日常此三つの人稱を使用して疑はざるにあらずや、予は之と仝一の理由に由りて又仝一の重さにて三位一体の思想を認容するものなり、又三位一体は予に於ては祈禱讃美の對象と云はんよりも、寧ろ之を口にするも口にせざるも嚴然として宇宙に存する宇宙の大法なりと云ふべきものなりと思惟す、既に對象として神を呼ぶ故に其對象が二岐に分るゝは人の惑ふ所なり、然れど予が一個の科學者として神を論じつゝある時には神は予の崇拜の對象にあらずして只宇宙の事實なり、之をエゴーの中に發見するも毫も妨げざるなり、否エゴーの中にこそ發見すべきものなり、否嚴密に云へばエゴーの中にのみ發見

すべきものなれ何となれば神は其實はエゴーなればなり、斯く言ふとも予は斷じて惡しき意味に於ける萬有神教徒にあらざるなり、世界は無數の點の集りなりと云ふことを許せばとて或圖形を捉へて之は點なりと云ふことの許されさるを知らば、予が假令エゴーの中に神は見出さると云へばとて直ちに缺點の魂なりと自覺しつゝある一個人としての予が神なりとの謂ならんや、予は一個人としては基督をも釋迦をも孔子をも其他過去、現在、未來に於ける如何なる人物をも神と認めざるなり、誰か彼の人は完全にして罪無き人なりと裁き得る者ぞ、完全又は無罪は只神の屬性

にして個人の屬性にあらず、基督の十字架如何に尊ときも之れ只に神の仁愛の一顯現のみ宰宙は只宇宙の犧牲献身に由りて救はるゝことを得ん、要するに三位一体と云ふことは畢竟文法に於て論ずる所の我と汝と彼との三人稱を全然仝一のものなり、何となれば以上の三者は其れ〳〵神と靈と人との三者に應ずればなり、予は三位一体の最良なる解釋は數學に於て求むべきものなりと信ず、而して零、一、無窮、無限までと云ふことを說く、此中無窮はプラスインフイニテイーとマイナスインフイニテイーとのポーラリチーあるの故を以て之を二と云ふを得べく、無限までは連續

的なるの故を以て三と云ふを得べしと考ふ、而して零は宗教の定義、一は哲學の定義、二は倫理の定義、三は科學の定義にして、數のイロハは宇宙の大系統を默示せりと信ずるものなり、予は此手紙を閉づるに當りて予が數學的の信仰告白を以てせん、足下は之に就きて如何に考ふるや。

其一

零（父）一（母）二（子）三（孫）

其二

零（我）一（汝）二（彼、彼女）三（我等、汝等、彼等）

零は父一は母なり二は子なり
三は榮ゆく孫とこそ知れ

再び齋木仙醉に與ふる書

親愛なる足下よ、予は足下の親切なる手紙に對つて多謝す、予は予のが足下に達せざりしかを恐れたりき、予は足下が之を落手したることを知りて喜ぶ、而して予は足下が再び書くべく充分親切なりしことを感謝す、予は上海に開かるゝ宣教師會議に臨み且は支那に於て小旅行を爲さんが爲に今丁度日本を見捨たるところなり、予は基督教青年會（フイ

ッシャー氏の許)にある予の郵便物を取らんが爲に五月の末頃日本に歸り、再び東京を訪はんと企つゝあり、予にして若し名古屋に滯在し、足下を訪問することを得ば、甚だ幸福ならん、予は足下と暫時共に在ることを得るを以て一つの特權なりと考へんとす、三位一体の眞理の説明と宣傳との爲に、足下が足下の夫人と共に、足下等の時と精力とを犧牲にしたりと足下の言はるゝ所のものに就きて或詳説を得ることは甚だ多く予を益することならん。

今は予は足下の手紙が予に對して提出し來りたる或思想を抑ふることを以て滿足せざるを得ざるなり、勿論、予は全

然足下に全意す多くの點あり、然れども短くする必要の爲に予は只不全意の點のみを記載せん。

一、「基督教徒は誰を彼等の神として尊ぶか」と云ふ問と、「基督教徒は誰を彼等の神として尊ぶべきか」と云ふ問との間には區別を爲さゞるべからず、予は最初の問は之を見捨ん、予は最初の事柄に關しては基督教徒は誤れる觀念と習慣と方式とを有し得ることを拒まんと欲せず、然れども眞理其自身に關する正理の事柄に關しては、基督教徒たる者はエロヒムをもエホバをも尊ばざるべからざるものにあらずと予には思はる、あらず兩者なり、予はエロヒムとエホバと

より更に大にして且つ更に優れたる神即ち抽象され、正誤されて又完成されたるエロヒムとエホバとを含む所の一つの神耶蘇基督の父を意味するなり。

二、予はエロヒムとエホバとが神の進歩的概念に於ける異りたる階段を代表するものなりとの觀念に對して差向られたる足下の議論に由りて充分確信せしめ得られさるなり、足下の論法は心理的よりもより多く論理的なり、足下の見解は動的よりもより多く靜的なり、歴史的よりもより多く冥想的なり、勿論足下若し中間の進化を省きて歴史的發達の兩極端を取らば、足下は甚だ能く言ふことを得ん、此等の兩極端は局處的に正反對にして、考ふべからざるものたり、從て一よりして他が導かるゝ如き歴史的發達あり能はずと、然れども論理は事實に對して何をか能くするや、又事實上歴史的發達あらば議論何をか能く證據立て得んや。斯くの如きものはヘブリユーの宗教の場合にてあるなり、予を以てすれば斯かる驚くべき發達のありしこと、イスラエルに於ける宗教的實驗の斯かる調和的又進歩的の連續ありしことは、基督教の眞理なることの最良なる證據の一なり、斯くの如く能く結合され又斯くの如く進歩的なる此等の實驗の背后に予は人々を次第次第により高き又より高

き精神狀態に又神のより尙き又より尙き概念に高むる所の聖靈の神秘なる影響を看出すなり、予にして若しもエホバ又は基督の我等の天の父なりと呼びしエリムよりエロヒムを撰ぶことあらば之れ予にはヘブリユウ及び基督敎徒の宗敎の中にありて最も生粹なるところを恣にし、見捨て、汚すが如く思はるゝなり、足下若し之を爲さば、足下は足下の全聖書を燒きて、創世紀の一章のみを保存して可なり、予は新約聖書を創世紀よりも無窮大に好むなり。

三、予は創造を然り、連續的創造をすらも神の愛の最上の記號なりとして考ふること能はず、勿論それは愛の一つの記

號なり、予はそを拒まず、反て予はそを確信す、然れど予は之よりも大なる愛あり能はずと云ふこと能はず、予は使徒聖ヨハネと共に神の最上の愛は贖罪の中に其自身を示すことを信ぜんとす、神は其獨子を賜ふ給ふ程に世の人を愛し給へり」と云ふもの之なり、足下は其子に對する父の愛の無上の記號は彼を生みたりと云ふことにありと考ふるか、予は爾か考へず、息子が情緒を以て彼の父の愛を考ふる時に、彼は決して生むと云ふことの正確なる働作を彼の心中に有せざるなり、彼は彼の父によりて彼の敎育の中に彼に與へられたる仁愛、智慧、親切、世話に就きて考ふるなり、人と神

との場合も亦然り、人に對する神の父的の愛の最良なる證據は創造又は本原てふことに左迄多く横はるものにあらず、そは預言者等及び耶蘇基督の默示が一部分を形成する所の超自然的の教育の中に存するなり、教育は進歩を意味するなり、耶蘇基督の神はエロヒムと同じ、然れど予は只此の同じ神に就きての我等の觀念が醇化され、擴大され又發育されしとのみは言はんと欲せず、否神も亦以前には超自然的には事物を行ひ給はざりしなり。

四、序ながら一言せん、予は予が足下の耶蘇基督に對する足下が立場を充分能く理解せるや否やを知らず、足下は耶蘇基督の無罪を許容せずと言ふ如く見ゆ、然らば予は言はざるを得ず、予に取りてはナザレの耶蘇の無罪と道德的完全とは、三位一體に關する如何なる信仰よりも遙かにより多く肝要にして且つ重大なりと、基督教の本質は三位一體の中には存せずして、耶蘇基督の道德的、宗教的性格の中に存ずるなり。

五、予は告白せざるを得ず、三位一體を說明若しくは證據立てんとする爲にすらも用ゐられたる形象が單なる形象たるより以外何物かにてある如く予の心に決して現はれざりしことを、例へば予は足下の「予は主格を命題の父、客格

を命題の母、擊辭を命題の子なりと考ふる者なり」と云ふ如き叙述の力を見ざるなり、予は想像す、足下若し、三位一体を信ぜば足下は斯かる言葉の中に粗雜なる解明の一種を見出すことを得んと、然れど若し足下にして既に之を信ぜざらんか、斯かる解明は足下を説得し得ざるべし、且つ彼等は完全なる解明にてすらもあるか、予は三つの人物代名詞の使用に就きても同じことを言はんと欲す、如何で斯かる物の能く神聖なる三位一体を證明し得んや、如何で之が三位一体の基礎たり又正當の理由たり得んや、實に予は議論の論理的勢力を見ざるなり。

六、予は數學的の比較に就きて同じことを言はんと欲す、彼等は予の心には文法的の形象よりより多く予を確信せしむるの力無きなり、形象は證據にあらず、足下の三位一体に關する註釋は $\frac{1}{0}=8$ の式なり、予は言はんと欲す、何故に $\frac{1}{0}$ か、足下は數學的に $\frac{2}{0}=8$ とも $\frac{3}{0}=8$ とも……$\frac{n}{0}=8$ とも云ふことを得ん、其れ故に一は此の式の必要なる部分にはあらず、一は專斷なり而して予は又言はんと欲す、如何なれば足下は創造の形象たるべく除法を取りしか、予には其目的に向ては、乘法の方一層自然なりと思はるゝが如何、我等の佛蘭西の天主教哲學者の一人なる、フアーザー、グラットリーは

8×0=n に於て創造の形象を見出さんとせり、彼に取りては無窺は神を意味す、神は靈若しくは無即ち(神)彼自身によりて乘じつゝn即ち彼の好む何物にても生ず、換言すれば變化の中なる世界を生ず、斯くの如きものは虛無よりの創造(クリエーション、エックス、ニヒロ)の說明又理由なり、思想は全く異りと雖も此等式は足下のと一樣の論證力を有するものならずや、予は斯かる等式の何ものもが予には何等の光も確信も給すべくは見えざるなり、故に足下の數學的說明に立ち歸りて言はん、予は如何にしても零が何でものの起原なりとか、無元主義は一元主義に優れりとか、零は一に優れりとか云ふ說に同意すること能はざるなり、予は足下の言葉と文章とを理解す、然れども彼等は予には憚りなく言へば、明白なる眞理の正反對を言ひ表はす、如く見ゆ、予は如何にして神の不可見性と無體性とを信ずる者が無元主義を信じられ得るかを考ふること能はず、彼等は、足下若し好まば、物質と空間との無元主義に於ける信仰を有すると云ふことを得ん(而して彼等は正し)然れども彼等は靈の實在と充實とに於ける信仰を有するなり、予自身に取りては、予は數學に於て靈的の事物に關する何等の光をも見ることと能はざるなり、數學的表徵は或物が他の物より何れだけ

多く正しきや正しからざるや等の如き全く異りたる仕方に於て用ゐられ得るものなり、之を要するに數學は事物の本質に觸れざるなり、予は直線の點に於ける關係が神に於ける聖靈の位置に就きて何等かの光を發することを信せんと試むることに於て成功すること能はざるなり、斯かる議論は予には空間即ち唯我等の現在の心の暫時的の狀態にて、眞正の又最後の實在を有する所のものにあらざる空間なるものを、爾か重大なるものとして取ることを敎へざる、近世哲學の全き唯心論的の發達に反對なるが如く見ゆ、空間は默示にあらずして一つの被のみ、又屢々眞正且つ眞實なる實在の腐敗と墮落を來らしむるものなり。

予は再ひ足下の親切なる手紙を謝し、我等の交際が書面の下に或は口演の形式の下に繼續し得んことを望む、予は足下が予の最も良き挨拶を受けんことを請ふ。

足下の眞摯なる　　ヘンリーボア

千九百七年四月二十二日博愛凡にて

再ひボア博士に與ふ書

予は折しも彼處此處に草花咲き居たりし池のほとりなる四阿屋に腰打掛けて、足下の敎訓に充てる親切なる手紙を

繰り返しつゝ讀みぬ、池にて鳴き瀕きる蛙の聲も予が耳には讃歌の如く聞えたり、而して予が胸には眞理の囁語ありき、道の爲めに勞する足下よ、予は實に足下が幸福を祈る、予は足下が批評の予の說に對して否定的なるを厭はず、其眞摯なるを悅ぶ、誠に足下は能く基督敎界一般の思想を代表せり、予は之に對して敬意を表す、然れども基督敎の敎理は予を滿足せしめざるを如何せん、以下予は足下に對して予の說の辨護を爲さんと欲す、足下請ふ之を熟讀せよ。

一、予は造物主を信ず、而してエロヒムの觀念はエホバの觀念よりも多く造物主に相應はしきを信ずるなり、足下が所謂基督の我等に天の父として示したりと云ふエリムは恐らくはエロヒムの訛言なるべし、予はエリムてふ語を斥けず、何となれば之れエロヒムと全じく複數の字にして、之の兩語は共に父母の兩德を含蓄する受造物の親と見るべきものなればなり、次に予はエロヒムの創造に就きて、予の意見を述ぶるの要あるを見る、予は創造と安息日とを以て宇宙歷史の一切なりと信ずること、恰かも日曜日より土曜日に至るまでが、一週日の總てを含むが如しと信ず、從て通常人の爲す如く創造を以て世界の最古史の一時期なりと思惟せず、又予は神に像りて造られたる男性女性の人てふも

のを以て通常我々が呼ぶ如き人間と思惟せず、寧ろ萬物に通せるデユアクスティックプリンシプルズなりと考ふ、(無論世に事實を離れたる原理なるものあることなし)斯かる次弟なれば予に於ては創世紀一章は宇宙悉皆の出來事の概括的記錄と見ゆるなり、釋迦基督、孔子、ソクラテス等の顯現も亦實に創造の一部のみ、予は足下が尊ぶ所の新約聖書の大なる價値を確信する一人なり、只予は造物主と創造との關係は深く考來れば宇宙の出來事の一切を包括するとのことに就きて足下の全意を得んことを希望す。

二、足下は「創造」繼續的創造をすらも神の愛の最高のものなりと思惟すること能はず」と言ひぬ、予は足下の意を了す、然れど足下よ反省せよ、創造には階段あることを、禽獸の創造あり人類の創造あり、換言すれば生命の創造あり心意の創造あり、人類の創造てふことが若し其高尚なる意味に於て宇宙に於ける人格の實現を意味すとせば此の創造は誰か神の大愛にあらずと言ひ得る者ぞ、足下が引證せし聖ヨハネが「神は其獨子を賜ふ程に世を愛し給へり」との句は予が神の子なりと主張しつゝある人の創造を其中に含蓄せる創造其者の價値を保證こそすれ毫も弱むるとなきなり、又足下は予が父の父たるは生むことが主要觀念なりと云ふ

ことを承認せずして寧ろ教育するとの上にありと云へり、然れども予は思ふ父は確かに主人及び教師以上の者なりと、ゼネレーションは父をして子を愛せしめ子をして父を愛せしむる原始的の本能なり、子は假令如何にして父より生れしかを理解し想ひ浮ぶること不能なるも可なり、要は父は子を生み、子は父によりて生れたること確實なれば足れり、見よ大木の根は深く地中に隱るゝにあらずや、我等は其根を見ること能はず、然れど其根なしには其木は生長せざるなり、予は固より神の支配及び教育を閑却するものにあらず、然れども此等を以て第二とするものなり。

三、予は何等の人爲的實教の信者を以て安んぜず、寧ろ世界の大宗教の統一に就きて多大の興味を有する者なり、又數學的眞理の中に大なる天啓を見出す者なり、又予の三位一體の研究は獨り神學上の要求よりに非ずして、一般的眞理の要求より出づ、予の神學説は實にそが一應用に他ならず。

四、予は遠來の客たる足下に對して出來得るだは多くの予が研究の結果を報告せんと欲して、却て説明の不足を來せしことを足下に謝す、予が提供せし説は寧ろ形象にして證據にあらずとの足下の批評は予は之を退けず、然れども足下よ、予は告白せん予は形象を以て斷定形成の要素として

之を尊敬するものなることを世に形象なきの觀念なるものあること莫し、數の如きも亦形象なり、一元主義と云ふ如き語も一神主義と云ふ如き語も孰れか形象の範圍を脱せんや、只零若しくは無元主義てふ語を形象中に入るゝは便宜上のみ、何となれば彼等は全然形象に對して消極的なればなり、足下よ、人間より若し數の觀念を取り去りたらんには我等は果して否と然りとを區別し得ると思ふや、無と有とを區別し得ると思ふや、人はカントの認識論の研究を以て哲學の根本的研究なりと賞讃す、然れどもカントも先天的とか敬天的とか主觀的とか客觀的とか云ふ如き意義明

確ならざる語を以て、其思想を發表したるなり、カント哲學が其繼承者に由りて多樣に解釋さるゝに至りしは其處のみ、予は數の觀念の根本的究を以て最良の認識論なりと考ふる者なり、予が零、一、無窮の三位一體說の寧ろ直覺的にして論證的にあらざるは之れ赤裸々の眞理を對象としつゝあるが故なり、前回の手紙に於て主格、客格、繫辭に就きて云々せしは數學と世俗的思想との交渉の密なることを證せんが爲めに論理の根本的形式の成立を解釋せんと試みたるなり、要は主格のコンスタントにして客格のバリエブルたり繫辭の否定的肯定的にファンクショナルなることを

覺束なくも暗示せんと欲したるなり、又我、汝、彼の三人稱に就きて云々せしは之れ宗教上に於て大切なる問題たる神の人格非人格に就きての議論に啓蒙せんと欲してなり、基督教徒の多くはオブゼクティーブ、パーソナルの神を信ず、佛教徒の高尚なる者はサブゼクティーブ、インパーソナルの神若しくは佛を信ず。而して予は實にサブヂエクライーブ、パーソナルの神を信ずるなり。之れ予がエゴーを高調したる所以なり、足下の云ふ如く三人稱の使用は固より世俗的のものなり。然れども、サンクティフアイ、されたる三人稱何ぞ神の三位一体を表するに足らずとせんや、見よ何人も神を彼よと呼ぶか汝よと呼ぶか、若しくは我よと呼ぶにあらずや、予が三位一体の關係を此間に見んとする又何ぞ怪しむに足らん。

四、予は足下が予の數學説に對して加へたる批評に對して答ふるの快を取らんと欲す。而して一應予が數學説の大体を述べ置くの、要あるを見る、予の數學説は從來の數學説を根本的に革命するものなり、從來の數學は量中心の數學なり、而して予のは質中心の數學なり、換言すれば從來の數學は一中心の數學なり、然れども予のは零中心の數學なり、從來の數學は數ふる爲の數學なり、予のは寧ろ性格付ける爲

の數學なり、然れば予は零てふ言語を通して形而上のものや無形のものやを言ひ現はすなり、之に反して一てふ言語を通して形而下のものや有形のものやを言ひ現はすなり、斯かる用法は二と云ふ數の觀念を定むるに當りて從來の數學說と予との間に存する超ゆべからざる講渠を一層明らかに示すものなり、從來の數學說によれば二は一と一との和を意味するなり、然るに予の數學說によれば、零と一と云ふ消極と積極との觀念を總稱して兩方（ポッス）と云はんが如し、若し其れ三に至りては無數を代表すとせらるゝなり、何となれば兩者の中に中間の第三者を求めらるゝ場合は程度

に應じて無數に存しればなり、知るべし予の數學說なるものは普通の數學說とは根抵に於て相異せることを、實に予の數學說は宇宙觀に應用せられたる數學なり、認識論に應用せられたる數學なり、今神に關して平易に予の數學說を適用して予の學說の性質を明らかにせん、宇宙に於ける物質に一定量あることは科學の認定するところなり、然らば造物主即ち神と云ふ思想は之を認容さる餘地なきか、然らず、見よ我等が個物と云ひて之を經驗しつゝある萬物は皆立方的のものなり、然れども此立方的の萬物を通して其處に平面あり、直線あり、更に美妙なる點なるものあることは

毫も矛盾にあらざるなり、予は三を以て立方体に比するものなり、二を以て平面体に比するものなり、一を以て直線に比するものなり、零を以て點に比するものなり、(ピタゴラス派の數學説と相異するところを見よ)而して予は萬物に神の内在することを以て立方体中に點と云ふ大自由のものあり、三と云ふ中に零と云ふ絶對的のものゝあることゝ仝一の事柄なりと信ずるものなり其中に藏せらる一魂の金剛石の存在は大山の價値よりも高價なる如く、一片の顔斷は能く一腕の水を色付るが如く、其如く神と云ふ量なきもの、形なきもの体なきものは能く無上至尊たるを得るなり、

神と云ふことを量の至大なるものと考ふるものは未だ予が神を理解すること能はざるなり、論者の要求する如き神は予の形而下の大原理として説く一が其要求を充たすべきものにてあるなり、以上の叙述にて畧ぼ予の數學説の性質を描きたりと信ずれば之より直接に足下が予の數學説の批評に答へんと欲す。

五、足下は$\frac{1}{0}=8$の式に於て$\frac{1}{0}$の分子の一を二にも三にも其他任意の數に什へ得るが故に一と定むるは專斷なりと言へり、足下よ予が$\frac{1}{0}=8$の式を使用したる動機は予が零と一と無窮若しくは二と云ふとの間に不離の關係あること

を示さんとてなり換言すれば此等の數の不離の關係に關して既に世人の知れる式を記載するとによりて讀む人に其關係を想起せしめん爲なり、予は先づ足下が此式を使用したる予の動機を解せられんことを望むなり、偖て足下は$\frac{1}{0}=\infty$の式に於て$\frac{1}{0}$の分子の一を二にも三にも其他任意の數に代へ得るが故に一と定むるは專斷なりと云へり、足下の言ふ所果して眞か、予の企と足下のと相違する第一のものは之なり、予の企は數學の式を應用して如何にして萬物が神より創造されしかを證明せんとするに在り、萬物とは予に取りては三の如き複雜なる數の義なり、然るに足下は之に反して最初より二若しくは三の觀念を許可す敢て問ふ足下は一なくして如何にして二若しくは三を思惟し得るや、予は二若しくは三の認識が世界に存在せずと云ふにはあらず、二若しくは三の認識は更に他の簡單なるものに歸せらるゝと云ふことを研究する先天の學ありと云ふことを云ふのみ、蓋し足下が掲ぐるものは後天の數にして實に予が導出せんと欲する所の者なるなり、若し一てふ自然一的の單位を媒せずしてnが單位となり得べくんばnの理由に就きて何等の探索も殘らざるべし、常識の世界には斯かる場合あり得べし、然かれども人間の究理心は之に

ては滿足せざるなり、予の所謂三と云ふ所は足下及び普通數學の立場なり、予は之を排斥するにはあらず、之の末原に更に深遠なる數理あることを證しするのみ、現今の數學者は一般に$\frac{0}{0}=\infty$を許すとは雖も、元來こは不完全不滿足なる言ひ表はし方なり、今$b=0$なりとせば$\frac{a}{b}$も$\frac{2a}{b}$も俱に0となる、然れども其比は依然として二なり、知るべし兩方の零は其値等しからざるを、予は思ふには頗ぶる零の窮した る用法なりと、一と云ふものが大となり小となり値を變ずると云ふことは自然なり、然れど零其者に大小を寓するは不自然なりと云はざるべからず之れ後天的の數學の弱占を露はしたるものなり

六、予は貴國の天主教哲學者ファーザー、グラットリーの創造說の大意を初めて足下より聞くことを得たるを喜ぶ、而して予は其人物及び學說に就きて今少しく知り度こと希望しつゝあり、予は今予の所信を吐露して彼の學說に對して短評を加へんと欲す、予は先づ言はん彼の公式は$\frac{0}{0}=$より導きたるものなるべければ、之れ後天的數學の系統に屬する物にて零は既に其第一義を失へりと、次に予は言はんと欲す、無窮てふものは予に取りては經驗的のもの零、一に比してより複雜なるものなりと見ゆ、例へば零を以てノンビ

ーイングと考ふれば一はビーイングにして無窮は其れビカンミングかビカンミングはノンビーイングとビーイングとの間にあるべきものなれ、プアーザー、グラットリーは如何なれば斯かる無窮なるものは公式の冒頭に掲げ、其認識を以て自明の眞理なるかの如くにはせし、又無窮には無窮大と云ふ意義と共に無窮小の一義あり、氏は果して無窮を神なりと云ふ時に彼の心中に無窮小の一義を記憶したるべきか最も疑はし、彼がゼ、クリエーション、エックス、ニヒロ(虛無中よりの創造)を主張したるや善し、而かも彼はニヒロ其者が神なることを認めずして世の俗論と一致して神が虛無を材料として世界を造りたりし樣に考ふるに至りては予の學說と相去ること天地も啻ならざるなり。

七、足下は言ひぬ、之を要するに數學は事物の本質に觸れざるなり」と、足下の聰明にして而かも此言ある予は時代の迷の如何に蔓延せるかを慨かざるを得ざるなり。他の數學說は知らず、予の數學說は斷じて世界の神に觸るゝものなり、零中心の數學は決して淺薄なるものにあらざるなり足下請ふ再思せよ、又足下は予が神と聖靈との比較を點と直線との比較に取れる如き所爲を以て空間過重となすものゝ如し、之れ一を知りて二を知らざるものなり、點は如何にも

從來空間を論ずるの始めに論ぜられき、而かも點は空間を超絶せり點何ぞ空間ならんや、予はカントが熱心に取り扱ひたる時間とか空間とか悟性とかと云ふことに對しても自家の意見を有す、カントの悟性てふことは予には速度と云ふことゝして理解せらる、而して時間と空間と速度との關係の物理學上の公式たる$l=vt$と云ふ公式と$\frac{l}{0}=\infty$と云ふ公式との間に不離の關係ありと認むるもの也、即ち時間の本性は零、空間の本性は一、速度の本性は無窮即ち二なりと考ふるものなり、予は今之が細說を爲すの餘裕なし、只予は足下に注意を促す、物理學上の問題も其厚始的なるところに至りては形而上的問題となれるものにして、零若しくは點の如きことを論ずることは宗教家が神を論ずることゝ毫も相違なきこと之なり、宗教上の問題も其末葉に至りては物理的問題と化するなり、足下は近世哲學の唯心論的傾向に全情を表せらるゝが如く見ゆ、足下よ予は斷言す、零を知らざるものは未だ唯心論の本領を知らずと、足下は又言ひぬ「空間は一つの點示にあらずして被のみ」と、予は空間の利害得失を論ぜんと欲するにあらず、予は數學者魂を以て宇宙を觀て空間なるものゝ存在に就きて記述するのみ、形而下のもの形而上のものを助くれば以て之を用ゆべし、害す

れば以て之を超脱すべし、予は宇宙に空間てふ觀念あるが故に之を掲ぐるのみ、何ぞ功利の見地よりして空間の存否を獨斷すべけんや、予は斯く述べ來りて公平無私なる數學者魂の神聖なるを自覺せざるを得ざるなり、聖なるかな、聖なるかな零、一、二、三よ、あゝ予は玆に神聖(テイベイン)なる簡潔(シンプリシテイー)を以て宇宙の道理の啓示せらるゝを見るなり。

明治四十年八月廿八日印刷
明治四十年九月七日發行

三位一体論奥附
定價金貳拾錢
郵税金四錢

著者　烏有仙士

發行者　東京市本郷區千駄木林町百九十六番地
日高藤兵衛

印刷者　東京市神田區三崎町三丁目一番地
山本邦彦

印刷所　東京市神田區三崎町三丁目一番地
日本印刷株式會社

發行所　東京市本郷區千駄木林町百九十六番地
日高有倫堂

複製不許

大賣捌

東京市京橋區尾張町　警醒社
東京神田區表神保町　東京堂
東京神田區裏神保町　上田屋
東京日本橋區箔屋町　前川
東京市日本橋住吉町　至誠堂
大阪心齋橋南久太郎町　福音社
大阪備後町四丁目　吉岡平助
京都二條川原町　寶文館
甲府市柳町壹丁目　大塚柳正堂
廣島市　積善館
廣島市東横町　友田藤助
岡山市岡山町　奥田金昌堂
周防岩國町　白金日新堂
山口大市町　同支店
高知市種崎町　澤本書店
熊本市新町二丁目　長崎次郎
鹿兒島市松山通り仲町　久永新藏
筑後久留米市　菊竹書店
靜岡市　吉見書店
横濱市　有隣堂
同　弘集堂
同　勉强堂
前橋市曲輪町　煥平堂書店
越後國水原　西村六平
新潟古町　西村支店
越後長岡　髦張次平
金澤市片町　宇都宮書店
高岡市守山町　學海堂書店
福井市佐桂枝中町　品川書店
信州長野市大門　西澤喜太郎
信州松本町　松榮堂
信州諏訪町　日進堂
陸中一ノ關町　佐藤喜年
陸奥弘前市土手町　今泉道太郎
青森市米町　同支店
秋田市茶町　成見清兵衛
北海道札幌區南一條西二丁目　富貴堂

獨逸哲學博士ドイセン原著　高橋五郎譯

近刊

古今東西 哲學通解

哲學は其範圍の濶大其問題の夥多其意義の深邃往々學者をして絶望の叫聲を發せしむ適ま少數之を究むるや忽ち厭世悲觀に陷りて往々自殺に安心を求めんとす然れども之れ哲學の十分領會せられざるより生ずる弊なり玆に獨逸の哲學者ドイセン博士は哲學に於ては古今東西を窮め就中印度哲學の蘊奥を究め純正哲學美學及び倫理に三大別して詳密に哲學の大體を描寫し哲學の何物たるやは氏に至りて初めて萬人の領會する所となりぬ高橋先生該書を飜譯し幾百萬の哲學志望者を滿足せしめんとす

徳田秋聲著（上製美本）

近刊

小說 母の血

定價七拾錢
郵稅拾錢

此篇題して「母の血」と云ふ。抑も如何なる母の血なか享けたる。汚血か、毒血か、將た惡血か。著者の靈筆に描出されたる幾樣の人物と共に此の一大雄篇は成れり。秋聲子が一年有餘の苦心に成れる新作は是なり。

齊木仙醉對佛國神學教授ボア博士

新刊

三位一體論

定價貳拾錢
郵稅金四錢

海老名氏對植村氏の三位一体論爭は一時宗教界に大波瀾を生じたりき神秘的なる此の問題は未だ解決されたりと云ふべからず、齊木仙醉氏は萬國學生基督教青年大會に公開狀を發して教會神學の三位一体論の謬誤を縱横に論議せり大會側にては佛國ボア博士之に答辯せり。斯くて兩氏互に駁論す、自稱預言者なる齊木氏勝つか　正統派の大家ボア氏勝つか、讀者之れが行司となりて孰れにか團扇を擧ぐる又妙ならずや、

高橋五郎先生著

近刊

英語實驗百話

定價卅五錢
郵稅六錢

高橋先生英語に於ては徹頭徹尾獨學を以て之が蘊奥を究め内外人をして均く舌を捲しめ高橋流の縮時術を繰述し聽者をして屢ば膝を打ち快と叫ばしむ加旃其百話たるや乾燥無味の術語に非ず形容無盡奇趣眞に横生す加ふるに世界語の比較論及異同辯を以てしエスペラント外に一層新らしき世界語迄も存在する事を說きたり實に新好著と謂はざる可らず青年諸氏の好指針、教員諸氏の好參考何人も欠く可らざるの良書也

田岡嶺雲著

新刊

霹靂鞭

價四拾五錢
郵稅金六錢

文壇の革命兒嶺雲が滿腔の不平は終に自ら其肺を爛らし今病を瀨戸内海白沙青松の間に養へりと雖ども元氣猶毫も衰へず玆に渾身の心血を傾げ盡して一書を著はす題して霹靂鞭といふ、敢むる所『近松の心中物』を初めとして數十篇悉く時代に反抗し文明を呪詛する著者が眞情を眞寫せるもの世の浮華輕佻なる當代の文學に慊焉たる者は來つて此の、世と相容れずして三十九年を四海に放淚し餘命甚だ長からざる天才者が熱と燃ゆる熱烈の言を聽け。

田口掬汀氏著

新刊

悲劇 熱血

定價參拾錢
郵稅金六錢

此書は掬汀氏が伊井蓉峰一座の請ひを容れて特に執筆せられたる脚本なり、脚本欠乏の聲ある今日此書が劇壇の要求に副へる事言を俟たず又單に讀物として見るも優れたる小說に等しき興味を與へん。

川上眉山著（頁數三百卅頁上製頗ル美本）

新刊

觀音岩

後編
定價八拾錢
郵稅拾錢

江湖の喝采を博し、文壇爲めに騷然たりし前篇は、社會に對する暗鬪の一半を描きたるまゝ、讀書界にも後篇を渴望せらるゝ事已に一歲、今玆に此篇成りて明治文壇の一大傑作遂に全し、請ふ愛讀の榮を給へ。

小栗風葉著　（美術的製本）

新刊

小說 新粧

價四拾五錢
郵稅金六錢

或は美人の粧を凝らして翠帳を出で、或は壯夫の劍を按じて陣頭に立つ、彼に麗情あり、燭を乘つて夜見る海棠の花、此に雄姿あり、雷雨忽ち去つて皓月中天に懸る滿幅の綺、風葉子が文壇に盛名を馳する所以のものは、實に此新粧あるを以てす。

大町桂月著

新刊 **代表日本人** （製本美）

定價八拾錢
郵稅金八錢

日本人を化せしは區々たる教義にあらずして事實也歷史也國體也祖先の發揮せる國民性也我が國には儒教佛教以外一種の武士道ありて今日の發展を致したる事今更言を待たざる所なるが武士道の眞相を知らむとせば理論のみにては不十分也之を人物事實に徵せざるべからず此書日本國民の特性を發揮せる人を擇びて其面目を描き日本國民の前路に光明を與へ教訓を與ふ一風變はれる日本國民の歷史也兼ねて道德經也。

文學博士 桑木嚴翼著（總クロース製本美）

性格と哲學

價壹圓廿錢
郵稅金拾錢

本書は高妙なる哲學宗教の問題より卑近處世法迄に女子問題を解釋し其他戲曲文藝等廣大なる範圍に亘り政齊愼密なる評釋を下せるものにして論理の井然たる文章の精采ある誠に學界の珍書たるを失はず好學の士は本書の教訓に依り必らず啓發する所多きを信ず。

大町桂月伊藤銀月刪修天續篇

再版 **文士寶典**

定價五拾錢
郵稅金六錢

東西諸文星の名篇玉什を襍め更に之を嚴密なる審美眼を以て、不朽の文字のみを撰擇し、文勢を保ち神韻を失はざる、繁簡の適度に於て、緊密に取捨按排し、文士並に文士たらんとする人の爲に、最良なる一卷の完備せる理想的資料寶典を編纂したる者也、之を繙けば、深刻腸を抉ぐる者、天衣無縫なる者、香氣齒頰に湧く者、奇句警語應接に遑あらず。

小栗風葉著 鏑木清方畫（上製美本）

三版 小說 **十七八**

價七拾五錢
郵稅金十錢

櫻は三月菖蒲は五月女盛りは十七八げに少女は人生の花なり而して少女の可憐なる心事と態度とは唯だ多情多恨の才子よく之を描き多情多恨の才子よく之を愛讀す風葉先生の濃麗筆を味はゝんと思はゝ大方の君子は請ふこの篇を讀まれよ。

綱島梁川譯（製本美）

近刊 **ルナン耶蘇傳**

定價
一圓五拾錢
郵稅十四錢

此書救主生涯、其懊きし神の國の思想、天父の觀念を叙べ、奇跡を論ふ、他の宗教との關係を明にし、其國家觀社會主義觀また此間に隱見す、自由詩究の精神一貫して批評の鋭刃觸れざる所なく、之がため一時歐米基督教界を震動して顏色失はしめたりと雖、世界史上に於ける耶蘇の位置は寧ろ之によりて確められたりと言ふべきなり梁川先生は鋼絢瑰麗。現代獨步の筆を以て此書を飜して世に問はる。世界の謬めて耶蘇傳の白眉となすものと模範的美文とは之によりて吾邦文壇に供へられむとする也

川上眉山著○淸方畫（上製美本）

三版 **觀音岩** 前編

定價八拾錢
郵稅金拾錢

同情豐富 文致清艶
思想高逸 裝釘美麗

これ本書の特色也。

大町桂月序 有倫堂編纂

再版 **明治大家文集**

定價八拾錢
郵稅金拾錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず今一々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易のことにあらずこの書論文といはず美文といはず小說といはず苟も文章を以て一家をなし特色を有せる文豪を撰びまた文豪の特色を發揮せる名篇を選び明治の文章家を集つめて此の書にあり之れ明治文學の縮圖にして一讀の下に以て明治の諸大家の面影を伺ふべく文壇の一大偉觀たるを失はず文を學ぶ人にありては以て眞模範とするに足る有益にして且つ興味あるヒ書なり。

饗庭篁村著 ○鏑木清方畫（上製美本）

三版 小說 **不問語**

定價
金七十五錢
郵稅金十錢

（附 大詩人出現 鹽原遊記）

竹裏の蟾蜍地仙と化して氣を吐くこと虹の如く鍬中の彌二郎壳鐵砲を發して僅に雀を驚かす、しかれども其光り天に沖り、其響き地を動かす、これ著者の手腕にあらずして其の不問語なり。

綱島梁川著（菊版總クロース頁數約千頁）

四版 **梁川文集** 定價二圓廿五錢 郵稅拾五錢

梁川綱島先生高邁博大の識、綿密理到の言、恰も燭を把つて照すが如しされど先生は談理是れ能とする學者に非ず一面冷靜細緻の頭腦を備へたる倫理學者にして他面別に抑ふ可らざる詩人の熱情を宿して天地を戀ひ此戀を滿へて日夜に瞑想し日暮に修養止まざる哲人也解脫の人也、理を談すれば簡淨にして靈活感興を道れば深邃にして豐麗其想獨特、其文獨特、嚴然一家を成して現代思想界の一角に拔く可らざる自家の領を占めて妄に他人の追從するを許さず是れ筆に非ずして人格なれば也弊堂幸に玉稿を請うて上梓するの榮を得たり敢て先生の高風を慕ふ所の諸君子に薦む。

海老名彈正先生著

三版 **基督教本義** 上製六拾錢 特製五拾錢 郵稅金八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放てる豫言者教師教祖の抱懷せる思想經驗に依らざるはなし本書は基督教界の明星海老名彈正先生卓拔の識勇健の筆を以て上はモーゼより下はルーテル、シュライエルマッヘルに到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教の本義を說明せられたるもの也幸に愛讀の榮を賜へ。

文科大學講師 夏目先生 上田先生 ロイド先生 校閱 チャールス、ラム著 文學士 小松武治譯 序文

八版 標註 **沙翁物語集** 定價七拾錢 郵稅金拾錢

本書は沙翁戲曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ジュリエット及冬物語等通じて十編の物語を拔萃し精緻なる飜譯を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附錄を以てす。特に文科大學講師先生の校閱を仰ぎたる者にして苟も沙翁戲曲の何たるやを窺はんと欲するの士は須らく一本を購ふて座右に備ふべき也。

匿名隱士著

八版 **破天人論** 定價參拾錢 郵稅金四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人生觀とを鼓吹したる壯快の書也本書の出づるや全國各新聞雜誌、大好評を博し今や第八版を發行せり以て本書が如何に愛讀せらるゝかを知るべし。

大町桂月著

十二版 **わが筆** 定價金四拾五錢 郵稅金六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり霸氣あり或は洒脫に或は沈痛に或は眞面目に或は誹諧に短くして寸鐵人を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆を以てす家庭學校會社及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情掬すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の快文字也

泉鏡花著○淸方畫（上製美本）

再版 **小說 無憂樹** 定價金八拾五錢 郵稅金拾錢

著者積年の思を籠めて、はじめより單行一册として新に筆を取りたるは、此の編を以て嚆矢とす、願くば紳士淑女をして良匠が彫心の經營に成りて、世に美しき戀を秘めたる一大宮殿の裡に遊ばしめむ。

文學士 久保天隨著

紀行文集 山水寫生 定價金四拾五錢 郵稅金六錢

天隨氏の紀行文は 世すでに定評あり。泰華を眼前に仰ぎ、溟渤を脚底に瀉かしむるもの、これ其文の特色にして、決して他人の模倣を容れざるものとす。本書收むるところは、長短無慮二十餘篇、その地を以てすれば、南鬼界の天に臨み、北蝦夷の境を踏み、實に著者帳中の秘たるものなり。造化の工を讃賞し、天地の美を景仰するもの、机上この書なかるべからず。

大町桂月著

七版 **我が文章** 定價金四拾八錢 郵稅金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縱橫自在眞情流露し行く處に行き止る處に止まり些の衒ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を道り洒落飄逸に快闊にして男性的意氣を發揮し而かも言外に情熱溢る文此に至れば聖なり先生の文の如きは、實に當代の逸品なり

饗庭篁村著○清方畫（上製美本）

再版 小説 **竹影集** 定價 金六拾五錢 郵税金拾錢

戀と慾との二筋道誰かは踏迷はぬ者あるべきその好き道しるべの「虚空塵」情義うるはしく花あり實あり血あり涙ある「山懷」前者は理情乖れ深く後者情趣偏に掬すべし著者が溢るゝ計りなる同情は如何なるものをも照さで止むまじく見えて嬉し

文學士 久保天隨著

文壇獅子吼 定價 金四拾五錢 郵税金六錢

博大精該の才識を以て、不偏不黨、文壇の趨勢を論斷し、毫も顧慮するところなきは評論家としての著者の態度なり、その問題は文學・史學・宗教・道德の諸方面に亘り虬龍の片甲、なほ能く雲を成す、一卷收むる處、凡そ七八十篇長短錯落、理致あり、情趣あり、眞個人間に稀見るの好文字、

伊藤銀月著

社會研究 **高原生活** 定價四拾錢 郵税金六錢

嶄新の思想奇創の文字を以て文壇を風靡せる銀月君、就中社會と人間とを觀察するに於て別個の眼孔を有すと稱せらる、此書最も適切に君の長所を發揮せるものにして、富士の裾野と人間生活との關係の現在及び將來を、非凡の才力を以て描寫し出だす、實に是れ絶好の題目にして當世未だ見ざるの珍書、社會と人間との新なる研究法を教ふるもの也

大町桂月著

六版 **家庭と學生** 定價 金參拾八錢 郵税金六錢

著者申す、我れに三男一女あり其れを斯くは、しつけむ、我れも斯くは覺悟せむと心に期するのみにて能く實行せむと斷言し得べき身の上ならねど家庭教育の大切なることを今更のやうに感じて愚者の一得もやとの世の青年の男女の前に呈し合して世の父兄の前にも呈する也

德田秋聲著

小説 **花たば** 定價 四拾五錢 郵税金六錢

此に美しく束ねられたる花の數は何々ぞ。紅白紫黄必しも剪綵の妙を悉さゞれども、清き自然の野趣は此の一束に盡きたり。全篇長短合せて十三章、總て作者獨擅の詩材にして、亦獨得の文字なり、秋聲子が眞技爾と拙貢を窺はむには、此篇を措て他に求むべからず。切に江湖の眞摯なる讀者の高聲を希望す。

大町桂月先生選

四版 第壹 **時代青年文集** 定價 金四拾錢 郵税金六錢

大町桂月先生選

第貳 **時代青年文集** 定價 金四拾錢 郵税金六錢

桂月先生最も青年を愛し指導教訓須臾も懈らず爰に滿天下青年諸子の傑作數千篇中より其尤なる者を拔き嚴正なる批評を加へて時代青年文集を編せらる收むる所叙事抒情あり論説奇簡あり將た新體詩あり成な絢爛花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を暨すべく元氣を鼓舞すべし附錄には當代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

文學士 久保天隨著

再版 美文韻文 **夕紅葉** 定價 三拾五錢 郵税金六錢

著者の美文は、潑墨の山水の如く、氣韵生動、豪宕の氣、筆端を繞り、かの蝶蕚を歌ふ底の軟弱文字に非ず。三生石、高蓮城の如き、事すでに奇に、文亦た雋、人をして、覺えず、起舞せしむ。韻文には、拔都征歌の歌、蒙古の大英雄を謳歌し、一唱腕鳴り肉躍る。壯丈雄潤、大空を横絶するに似たるもの、唯だ本書に於て之を觀るべし。

饗庭篁村著

再版 紀行文集 **天下泰平** 定價 金四拾五錢 郵税金六錢

文章絢爛の極致に入り閑淡にして味深く眼前の景口頭の語自然に出で、沖淡深粹最も及び易からざるは篁村先生の紀行文也本書題して天下泰平と云ふ命題既に洒脫也中に收むる所悉く先生が輕妙老熟の筆致以て山水美人事美の意態景趣を曲盡せる者也殊更に奇巧を求めざる紀行文の淡粹なる趣を味はむとする人士は請ふ一本を備へよ

大町桂月先生　中內蝶二先生合著

六版

少女と山水

定價廿五錢
郵税金六錢

人生の美凝つて少女に在り自然の美凝つて山水にあり山水の美や豪宕にして洒灑少女の美や優婉にして可憐蝶二君の文少女の嬌態を描きて筆底に脂粉の氣あり桂月君の洒脫の文山水の幽趣を寫して雲烟紙表に浮動す双々相對して作者各得意の筆致を縱にし高尙優雅家庭の讀物ともすべく文章の手本ともすべし腥風血雨に惱める宇國の讀者諸賢幸に這般淸麗の文字に接して宇宙の美を味び給ふべき也

姉崎博士序　萬朝報記者茅原華山著

改訂五版

向上の一路

定價參拾錢
郵税六錢

向上の一路に就かんと欲する者は此書を讀め我國に於て哲學的に社會主義を建設したるは此書を始めとす▲安部氏の駁論及著者の駁々論は益々新社會主義の本領を發揮し共に光彩陸離たり▲近時の一大著述にして情理該れ臻る者は此書なり敢て江湖の讀書子に勸む

海老名彈正先生著

宗教々育觀

定價
金五拾五錢
郵税金八錢

基督教の三大綱
（其一）神觀　（其二）世界觀　（其三）人觀

宗教界の明星として名聲天下に轟ける海老名先生は本書に於て教育問題に關する所信を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動するに足るものあるや必せり見よ先生が該博の識公明の論一讀人をして快刀思想界の亂麻を截つの感あらしむ而かも本書の內容は單に教育問題に限らず廣く宗教の根本義に對する先生最近の思想を發表せられたるもの實に濃々たる我邦思想界に於ける一大探海燈たるや疑を容れず大方の識者請ふ刮目して見られよ

大町桂月先生序　角金潮聲著

四版

宇宙と人生

價貳拾五錢
郵税金四錢

宇宙と人生の問題豈常人の言ひ易き所ならんや玆に哲學者あり宇宙の幽を闡き玄を究め森羅萬象の生滅變化の本源に溯りて人生の眞諦を內觀直視せんとす玆に詩人あり天地の美に動眞に肉薄して以て人生の本義を直觀捕捉せんとす本書は哲學者の想と詩人の情を文に綴りしもの古高の韻、艶麗の致、讀者をして三嘆せしむ宇宙と人生とを謳はんとする者は來りて本書を繙け。

醫學士　佐々木多聞著

再版

新化粧

價金四拾錢
郵税金六錢

歐米化粧術の粹を參酌し日本古來の化粧を折衷し拾四章に別ちて最も進步せる化粧を說く通俗文章趣味ある研究美術的化粧を欲する者は此書を讀め化粧臺の飾本として必ず一冊を備へよ世にありふれたる俗惡淺薄なる化粧書と同視する勿れ

醫學士　佐藤得齋著

美的衛生

定價
金四拾錢
郵税金六錢

著者一種の詩眼ありて、有ゆる天然人事の美を捉へ、專門の衛生學に配合調和し、熟練十二分、極めて美的なる衛生の新方面を唱導せり、一面より見れば、美的衛生は人間の生活を美的ならしめんと試みたるもの一種の美的生活論也、論旨の美、文章の美相俟つて、之を醫學界の珍とすべく、又文壇の奇とすべし

本居豐穎撰

紫文摘英

定價
金參拾五錢
郵税金六錢

源氏物語が千古の大文學たるは今更贅言を要せず而も之を教科書に使用せしむるには餘りに浩瀚に過ぎ又事實に悖倫の箇處多く女子教育家の齊しく遺憾とするところ源氏博士の稱ある本居先生大に之を慨し五十四帖を通じて其英を摘み蕪を去り最も聯絡と校訂に意を用ひ「紫文摘英」を編せらる即ち是れ源氏全篇の縮圖にして一讀其大意を窺ふべく併も紫文の妙は此上下二卷に盡くせり各種學校の良教科書たるは勿論苟も國文學に志あるの女士は必ず一本を備へざるべからず乞ふ高讀の榮を給へ

半井桃水著　淸方畫

再版

小說

慰問袋

定價
金七拾五錢
郵税金六錢

硝烟彈雨の下に在りて勇將猛卒を樂しましめし慰問袋に戰時裏面の材料を收めて洽く讀者に分たんとする桃水氏が從軍土產

海老名彈正先生著

人道

定價金拾錢
郵稅金二錢

先生時局に關し大に感慨するところあり其の豫言者的熱識を傾盡し集渾壯大萬丈の光焰を吐き以て日露戰爭の意義を高め國民の元氣を鼓舞作振せんと欲す乃ち宗教家の戰爭觀を告白せんとす實に軍國々民の必讀書たるのみならず軍隊慰問の好册子なり

景山英子著

四版

妾の半生涯

定價金參拾五錢
郵稅金六錢

大井憲太郎等と共に有名なる大阪事件に與せし女傑景山英子は即ち本書の著者也彼女の幼少が鄉里の才媛として如何に譽高かりしか彼女如何にして大阪國事犯に與せしか在獄三年の生涯は如何なりしか如何にして情人と離れ如何にして良人を得たるか赤貧なる慈母として悲哀なる寡婦として多恨なる彼女の生活は如何なりしか本書は實に其典折波瀾錯節纏綿せる一箇の大悲劇を描けるも也

泉鏡花著○清方畫

參版

小說 誓之卷

定價金七拾五錢
郵稅金拾錢

これ鏡花先生があふるゝばかりの同情を以て天と、地と、人に、訴へて同情を求める、初戀の詩篇也。

茅原華山編纂

我と人

定價二拾錢
郵稅金六錢

本書は萬朝報の黑岩先生を初め諸家の談論文章を筆錄したるものなり、柳は綠花は紅、是書を讀めば諸名家と共に一堂春風の中に座するの感あるべし

ヂョサイア、スツロング原著、石川三四郎譯

二十世紀の大覺醒

定價三拾錢
郵稅金四錢

本書は基督の福音敎徒の使命並に天國の根本原理に亘り新解說を試み靈活剛健なる信仰を鼓吹せるものなり

萬朝報記者　茅原華山編纂

青年と詩吟

價二拾五錢
郵稅四錢

本書は茅原華山氏が各諸先生に囑して各々其愛誦さる漢詩、和歌、新體詩、俳句を撰び編纂せられたるの書日夕此卷を抱いて諷誦せば其品性を修養し其志氣を砥礪するの功蓋し計るべからざるものなり

基督教講壇集

定價七拾錢
郵稅金八錢

本書は眞に生命の麵麭靈活の根原たる現代基督教界のあらゆる大家の說教を網羅揭載したる雜誌講壇の全部を合し改册せしものなり居ながら各大家の口演を聽聞する好册子其內容に於ては活水如湧の感あり乞ふ愛讀の榮を給へ

泉鏡花著

小說 なゝもと櫻

定價四拾錢
郵稅金六錢

鈴木秋子女史著

再版

軍國の婦人

定價廿八錢
郵稅四錢

苦學社編輯

苦學の伴侶

定價金三拾錢
郵稅四錢

橫山筆助著

再版

成功したる催眠暗示術 應用自在

定價參拾錢
郵稅四錢

山口先生序　シルレル原著　齊木仙醉譯

接神術

定價廿貳錢
郵稅金四錢

杉山先生書簡　黑澤辰三郎編

日本名家手簡

定價參拾錢
郵稅金六錢

齊木仙醉先生譯

トルストイ教訓小說集

定價參拾錢
郵稅金四錢

加藤直士譯

トルストイの日露戰爭觀

定價參拾錢
郵稅金四錢

高橋五郎著

杜伯品藻

トルストイ伯の主義人物を評す

價參拾五錢
郵稅金六錢

蘆風秋元喜久雄譯

四版

獨逸詩粹 **紛紅集**

定價卅五錢
郵稅四錢

文學士 小原無絃譯

原文對照 **バーンスの詩**

定價三拾錢
郵稅金四錢

文學士 小原無絃譯

原文對照 **シェレーの詩**

定價金三拾五錢
郵稅金四錢

泡鳴著

新體詩集 **悲戀悲歌**

定價卅五錢
郵稅四錢

泡鳴著

新體詩集 **夕潮**

定價卅五錢
郵稅六錢

細越夏村著

新體詩集 **靈笛**

定價三拾錢
郵稅四錢

秋元蘆風譯

獨詩 **野葡萄**

定價卅五錢
郵稅金六錢

○原文對照○卷末に評註を附す

258
158

東京高等師範學校

特 18
362

三位一体論

国立国会図書館

020668－000－1

特18－362

三位一体論，仏国ボア博士対斎木仙酔

烏有　仙士／著

M40

ABI－0485